

# かわいそうな粉ひきの若いものと小猫

ヤーコップ、ウィルヘルム・グリム Jacob u. Wilhelm Grimm

金田鬼一訳

青空文庫



ある水車すいしやごや（一）に、粉こなひきのおじいさんが住んでいました。おじいさんのところには、おかみさんもいず、子どももなく、若いものが三人奉公ほうこうしているだけでした。この三人がここになん年ねんかいてからのこと、ある日、おじいさんが若いものに、「わたしも、としをとつてな、ストーブのうしろへすわりたくなつたよ。おまえがた、旅にでなさい。それでな、そのみやげにいちばんいい馬をもつてきたものに、この粉こなひき所じよをあげる。そのかわり、この小屋こやをもうたものは、わたしを、死ぬまでやしのうてくれるのだぞ」といいました。

ところが、この若い者のうちで三番めのは下したつぱのおいまわし

で、あとの二人ふたりからは、わからずやあつか扱いにされていて、これに粉ひきごやをせしめられるのは、ふたりとも感心しません。もつとも、この男のほうでも、べつに小屋こやをほしいともおもっていないのです。

とにかく、三人そろって旅に出たものですが、村をではずれると、兄弟子あにでしふたりは、わからずやのハンスに、

「おまえは、ここにいるほうがよかる。おまえなんぎ、一いっしょう生せいかかったって、駄馬だば一つ手にはいりやしないよ」と言いました。

そう言われても、ハンスはくつついて行きました。夜よるになって、三人は洞穴ほらあなにたどりついたので、そのなかへは行って、ごろ寝ねをしました。

ちえのある二人は、ハンスがしょうたいなくねこむのを待って、自分たちだけ上へあがると、ハンスをおいてきぼりにして、どこかへ行ってしまうました。これで、二人はうまくしてやったと思つたのですが、だめ、だめ、そううまくいくわけのものではありません。

お日さまがのぼって、目をさましてみると、ハンスはどこかの深い洞あなの中にくわがっていました。ハンスは、そこいらじゅうきよろきよろ見まわして、

「こりやあ、よわった！ どこにいるだあ」

と、大きな声をしました。それから起きあがると、手足をちよこまか動かしながら洞穴をはいあがって、森へはいつて考えました、

「おれときたら、こんなところでほんとうの独りぼっち、だれにも相手にされやしない、どうしたら馬が手にはいるのやら」

こう考えこんでとぼとぼ歩いているところへであったのは、小さな三毛猫です。三毛猫は、いかにもわけへだてなく、

「ハンスさん、どこへ行くのよう」と、声をかけました。

「なあんだ！ 話したって、おまえさんにやどうもできやしないや」

「おじさんのおのぞみがどんなことだぐらい、ちゃんとわかっていますよ」と、小猫が言いました、「おじさんは、いい馬が一頭ほしいのね。あたしについてらっしゃい、そうして、あたしのめしつかいになって、七年だけ、かげ日なたなく働きなさい、そうし

たら、馬を一頭あげることよ、おじさんが、生まれてから一度も見たことのないような、りっぱなのをね」

「はあてな、きみのような猫だぞ」と、ハンスが考えました、「だが、ひとつためしてみんなかな、こいつの言うことがほんとうだかどうだかね」

相談がまとまって、猫はハンスを魔法のかかっている自分の小さな御殿へつれて行きました。ここにいるのは猫ばかりで、それみんな三毛猫のごけらいなのです。猫どもは階段を身がるに跳びあがったり跳びおりたり、それはそれは陽気で、いきげんでした。日が暮れて、みんなが食卓につくと、三びきだけは音楽をやらされました。一びきはチェロを弾<sup>ひ</sup>き、一びきはバイオリンをひ

き、三びきめのは、ラツパを口にあてがって、いっしょうけんめに頬ほつぺたをふくらませました。

ごはんがおしまいになると、食卓がかたづけられました。

三毛猫は、

「さあ、おいで！　ハンス、あたしのおどり相手におなりよ」と言うのです。

「いやだ！」と、ハンスが返事をしました、「にやあにやあのおじょうちゃんとおどおどるのあ、ごめんだ、そんなえなこと、まんだやったことがねえだでのう」

「そんなら、この人をおとこへつれといで！」

と、三毛みけが小猫どもにいいつけました。そうすると、一びきが燈あ



火をもつてハンスを寝間へつれて行く、一ぴきが靴をぬがせる、一ぴきが靴くつした下をぬがせる、そしていちばんおしまい、一ぴきが燈火を吹きけしました。

あくる朝になると、また、小猫どもがやってきて、ハンスがおとこから出るのを手つだいました。一ぴきは、ハンスにくつしたをはかせる、一ぴきは、くつ下どめを結んでやる。一ぴきは、靴をもつてくる、一ぴきが顔を洗ってやれば、一ぴきは、濡ぬれている顔を、じぶんの尻尾しっぽでふいてやりました。

「こりやあ、ほんとに肌はだざわりがええぞ」と、ハンスが言ったものです。

こんなにしてもらいましたが、自分はまた三毛猫につかえて、

毎日薪まきを小割こわりにしなければなりません。この仕事をするのに、ハンスは銀の斧をうけとりました。銀のくさびと銀のこぎりぎりをうけとりました。それから、槌つちは銅あかがねでした。ハンスはこうやって薪をこなしたり、家の中にいればおいしい物を食べたり、おいしい物を飲んだりしているのですが、顔をあわせるものは、三毛猫と三毛のめしつかいばかりです。

あるとき、三毛はハンスに、

「外へでて、あたしの牧場まきばを刈かってね、刈りとった草をほしておくれ」と言つて、銀のものでは、（立っていて使う）大きな草くさか刈鎌りがまを、黄金きんのものでは砥石としいしを一つわたして、これはのこらずちやんと返しておくのだよといいつけました。ハンスは外へ出て、

いいつけられたとおりのことをしました。仕事をしてしまうと、ハンスは鎌かまと砥石こと乾ほし草くさをうちへもちかえつて、まだお礼をもらうわけにいかないかと、きいてみました。

「だめ！」と、三毛がいました、「そのまえに、もう一つやつてもらうことがあるの。あすこに、銀の材木があります、それから手ちような斧なでも、さしがねでも、いりようのものはなんでもみんな銀でそろつてるから、あれで、まず小ちいさな家を一軒けんたてとくれ」

そこで、ハンスは小さい家を一けん建ててしまつてから、することはもうみんなしてしまつたのに、馬だけはまだもらわずにいるが、と言いました。このときはちようど七年たつていたのですが、それが半はん年としぐらいにしか思われませんでした。

あたしの馬が見たいの？ と、猫がたずねました。

「見てえだよ」と、ハンスが言いました。すると、三毛は小さな家をあげました。戸をあけると、馬が十二頭とうずらりとならんできます、いやもう、おどろいたのなんの、あたまを高くあげてるよ。うすのそのりっぱなこと、毛づやはまるで鏡のように、ぴかぴかしているその美しさに、ハンスの心しんの臓ぞうは、かげながら、にこにこがおです。

三毛猫はハンスに飲み食いをさせてから、

「うちへおかえり！ 馬は、つけてあげない。三日みっかたつたら、あ

たしが、自分でおまえのそこへとどけてあげるよ」と言いました。

こんなわけで、ハンスは旅だちました。三毛は、粉ひきごやへ

かえるみちを教えてやりましたが、新しい着物をこしらえてやら  
ず、はじめから着ていた古いぼろぼろの上うわつぱり一枚でとおした  
ので、これも、七年たつうちに、あっちもこっちもつんつるてん  
になつていました。

ハンスがうちへかえつたときには、あと二人の若いものも戻つ  
ていました。二人とも、馬をつれて来たには来たのですが、一人  
のは盲めくらで、もう一人のは跛びっこでした。ふたりは、

「ハンス、おまえの馬はどこにいる？」とたずねました。

「三日たつと、あとからやつてくるだ」

これをきくと、二人ともわらいました、

「どうだい、ハンスは、ハンスだなあ、おまえ、馬をどこからつ

れてくるつもりだい？ さぞりっぱなやつだらうて」

ハンスはお部屋へやへはいりました。すると、粉ひきの親方が、おまえは食卓についてはいけない、きものがぼろぼろだからな、だれか他人ひとが来でもしたら、とんだ恥はじをかかなくちやならないと言いました。それで、ハンスの食べる物は、ちつとばかり外へだしてやりました。それから、晩になって寝にいきましたら、あとの二人はなんといつてもハンスに寝どこをやらないので、ハンスは、しかたなしに、とうとう鷺がちょう鳥うのこやへもぐりこんで、ほんのすこしばかりある堅いわらの上にころがりました。

朝になつて目がさめたら、もう三日という日がたつていて、六頭とうだちの馬車ばしゃがやってきました。まあ、その馬のかがやく毛づや、

これこそほんとうに見物するねうちがある、見ごと、みごとというわけです。それに、ごけらいが一人、別に七頭めの馬をひいていました。これは、このかわいそうな粉ひきの若いもののもらう馬なのです。馬車からは、きらびやかな王女がおりたつて、粉ひきごやへはいました。この王女というのは、例の小さい三毛猫で、ハンスは、かわいそうに、この猫に七年のあいだつかわれていたのです。

王女は粉ひきに、粉ひきの下ばたらきだという若い者はどこにいますか、とたずねました。おやかたは、

「あれは、このこやへ入れるわけにいきましねえ、なにぶんおんぼろでござんしてな。がちようごやにねそべつておりやす」と言

いました。すると、王女は、たった今すぐにその者をつれてきてもらいたい、と言いました。それで、みんなしてハンスをつれだしてきましたが、当人とうにんは、よんどころなくちんちくりんな上うわつぱりの前をかきあわせて、はだか身をかくしました。それと見て、かかりのごけらいは、ながもちのとめがねをはずして、りっぱなきものをとりだし、無理むりむたいに若いものに行ぎょうずい水をつかわせて、それを着せました。で、こうしてしたくがすっかりできあがつてみると、その美しいこと、どこの王さまもかなうまいと思われるほどでした。

それから、王女は、ほかの粉ひきの若いものをつれてきた馬を見せてもらいたいと言いました。そこへでてきたのは、一頭は盲



で、一頭はびっこでした。王女は、ごけらいにいいつけて、七頭めの馬をつれてこさせました。粉ひきはこれを見て、こんなすばらしいのは、これまでにここへきたことがない、と言いました。

「おまけにこれが、三番めの若いしゆうにあげる馬なのだよ」と、王女が言いました。

「では、あれがこのこやの持ちぬしになるのでござんす」と、粉ひきが言いました。王女は、約束の馬はここにいる、水車ごやも、そのままおじさんのものにしておくがよい、と言いつて、じぶんは、かげ日向ひなたなく働いてくれたハンスを馬車に乗せ、相乗あいのりで行ってしまいました。

ふたりは、いちばんさきに、ハンスが銀の道具をつかつて建て

た小さな家のほうへ馬車をはしらせました。行ってみると、その家は大きな御殿で、なかにある物は、なにもかも銀と黄金きんばかりです。ここで、王女はハンスと御婚礼をしました。ハンスはお金もちでした。生しょうがい涯がいこまることのないくらいのお金もちでした。それですからね、わからずやは碌ろくなものになれっこないなんて、決して、そんなことをいうものではありませんよ。

(1) この粉ひきごやでは、水車でなくて風車を使っているのかも知れませんが、原文にその区別をあらわす言葉や表現が見られないので、わかりやすく、水車小屋としておきます。





## 青空文庫情報

底本：「完訳 グリム童話集（三）〔全五冊〕」岩波文庫、岩波書店

1979（昭和54）年9月17日改版第1刷発行

1989（平成元）年5月16日第13刷発行

※「若いもの」と「若い者」、「いいました」と「言いました」、「で」と「出」、「洞穴」と「洞あな」、「弾き」と「ひき」、  
「靴下」と「くつした」と「くつ下」、「見ごと」と「みごと」、  
「鶯鳥」と「がちょう」、「跛」と「びっこ」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「一二〇 かわいそうな粉ひきの若いものと  
小猫 (KHM 106)」となっています。

入力：かな とよみ

校正：noriko saito

2019年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# かわいそうな粉ひきの若いものと小猫

ヤーコップ、ウィルヘルム・グリム Jacob u. Wilhelm Grimm

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫  
著者 金田鬼一訳  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>